




オレンジクロス

～ 理想の地域包括ケアシステム創造に向けて ～



一般財団法人

オレンジクロス



巻頭言

平成25年に出された社会保障制度改革国民会議の報告書は、医療と介護を一体的に考え、その提供体制を改革するよう訴えている。そして、「治す医療」から「治し・支える医療」へ、「病院・施設型」から「地域・在宅型」へという改革のキーワードを打ち出した。これに基づき、平成26年に「地域における医療及び介護の総合的な確保の促進に関する法律」が成立した。この法律は、地域において効率的かつ質の高い医療提供体制を構築するとともに地域包括ケアシステムを構築することを通じ、地域における医療及び介護の総合的な確保を促進する措置を講じ、もって高齢者をはじめとする国民の健康の保持及び福祉の増進を図り、あわせて国民が生きがいを持ち健康で安らかな生活を営むことができる地域社会の形成に資することを目的とするとされている（第1条）。また、「地域包括ケアシステム」とは、地域の実情に応じて、高齢者が、可能な限り、住み慣れた地域でその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、医療、介護、介護予防（要介護状態もしくは要支援状態となることの予防又は要介護状態もしくは要支援状態の軽減もしくは悪化の防止をいう。）、住まい及び自立した日常生活の支援が包括的に確保される体制をいう（第2条第1項）とされている。その構築に向けては、医療と介護の連携、高齢者の生活支援サービスの充実、地域医療介護総合確保基金に基づく事業、認知症施策など新たな地域支援事業の促進などの課題がある。

このような構想が生まれてきた背景には、我が国の人口構成の変化がある。総人口の減少、高齢化の進展、生産年齢人口及び年少人口の激減、老年人口の生産年齢人口に対する比率の急騰が続く中で、少子高齢化により、高齢者の割合が増え、2060年には1人の高齢者を1.2人で支えなければならなくなり、首都圏など都市部への人口集中、地方の人口減少も進む。このような人口構造の変化が、医療に及ぼす影響は甚大であり、医療費の増加、医療に従事する人材の供給面に影響を及ぼす。これまでのように、「病気を治す」ことだけでなく、高齢化社会では、「生活を支える」医療が大切になる。そうになると、行政の役割は、医療の隣接領域である、保険、介護、福祉、住宅、就労にまで広がることになる。これを将来の税収だけで賄うことはできないであろう。これを補完するのが財団の役割である。当財団は、「～理想の地域包括ケアシステム創造に向けて～」をその活動の目標としている。まさに時代の要請にかなう事業をその目的としているのであって、今後の活動が大きく期待されるゆえんである。

弁護士
一般財団法人オレンジクロス評議員

日野 正晴

ひとりの住民、ひとりの人間として、 “地域”と関わることの大切さ。



馬淵 茂樹 さん 藤 純一郎 さん 江川 恵子 さん

浅草にある東京トータルライフクリニックでは、医師と看護師、ケアマネージャーがチームを組み、地域包括ケアプロジェクト「ことよんカフェ ～認知症予防カフェ～」を開催。このページでは、プロジェクトがスタートするまでの経緯、どのような心掛けや苦労があったのか、そしてどのような結果に結びついたのかをご紹介します。

地域包括ケアプロジェクトを計画した背景

江川さん

2015年2月、当クリニックの馬淵理事長と藤医師、関連事業所の山田ケアマネージャーと看護師である私の4人で、オレンジクロス主催の地域包括ケアステーション実証開発プロジェクトのミーティングに参加しました。このプロジェクトの目的は、「住み慣れた地域で、その人らしい暮らしを支える持続可能な地域ケア」を実現すること。これは、オランダのビュートゾルフという非営利団体が取り組んだ、“玉ねぎモデル”と呼ばれる在宅介護支援の新モデルになっています。

このプロジェクトはわずか1年という期限付きなので、私たちは“自助（＝セルフケア・セルフマネジメント）”“互助（＝家族・隣人・友人などのインフォーマルネットワークの構築）”

に取り組むことになりました。

認知症予防カフェ開催までの道のり

江川さん

ミーティングの一月後、事業計画を作りこみ、意気揚々と町内会に提案しに行きました。しかし、私たちを待ち受けていたのは衝撃的な結果でした。町内会からは、「申し訳ないけど、今は難しい」との答え。こうなることは誰も予想しておらず、大きなショックを受け、プロジェクトは早くも頓挫してしまいました。

馬淵さん

道が閉ざされた私たちは、「なぜ、地域に受け入れられないのだろう？」ということをとことん話し合いました。今でこそ分かるのですが、この地域では5月に開催される“三社祭”を何より大切にされていたんですね。お祭りを中心とした一年のリズムがあったわけです。私たちが話を持って行った3月は、お祭りの準備で町内会は多忙を極めていました。

江川さん

そしてもう一つ気づいたのが、“目線の高さ”でした。医療



者として、「いいことをしているのだから、受け入れてくれて当然」という無自覚な驕りがあったのではないか、と思ったんです。そこでまずは専門職としての立場を脱ぎ捨て、一人の人間、いち住民として、地域に入っていきこうということになりました。三社祭を目前に控え、みなさんが大切にするお祭りに少しでも参加させていただけたらありがたい、という気持ちでお手伝いをするようになったんです。その中で、女性部のみなさんと一緒にお弁当を食べたり、雑談をしていたのですが、ある会話がふと耳に飛び込んできました。それは、認知症の話題。「自分の母親が認知症かもしれない」「自分が認知症になったらどう



しようかしら」という会話です。そのときに、“認知症への不安”という地域のニーズを発見しました。

藤さん

お祭りのお手伝いを通じて、地域包括ケアプロジェクトへの理解を得ることができた私たちは、台東区寿4丁目で“認知症予防”をテーマにした「ことよんカフェ」を計画しました。予防をテーマにしたのは、自分のライフスタイルをどうすべきか、自分が心掛けられることについて関心を持っていただければ、もっと寿4丁目が元気な地域になるだろうと考えたからです。第一回目の開催にあたり、イベントのチラシをポスティングしたり、掲示板に張り出したり、回覧板で回すなどして告知をしました。

江川さん

実は私は、三社祭の1～2ヵ月後に寿4丁目に引っ越しをしたんです。「地域に入っていきには、住民になることが重要なのではないか」と、思い切って決断しました。地域の住民になってからは、女性部のみなさんと月2回の廃品回収などにも色々参加するようになりました。

藤さん

今まで私たちは住民の方にとって、“外から入ってきた人”だったのが、これをきっかけに“寿4丁目の一員”という風に

ことよんカフェ ～認知症予防カフェ～

台東区寿4丁目で開催されている「ことよんカフェ ～認知症予防カフェ～」。住民の方に、認知症予防について知っていただき、地域の絆を深めたいという思いからスタートしました。“ことよん”とは台東区の“寿4丁目”に由来しており、「地域に愛される場になりたい」という思いが込められています。

2015年9月より、2ヵ月に1回のペースで開催されている「ことよんカフェ」。4月7日（金）に第8回を迎え、「認知症予防と絆」“あなたの人生において大切な人”をテーマに、グループごとにエピソードを語り合うワークショップが実施されました。40名もの方が参加され、カフェ特製の美味しいケーキや飲み物を楽しみつつ、大盛り上がりの中では幕を閉じました。

お問い合わせ

トータルライフ訪問看護ステーション雷門
〒111-0042 東京都台東区寿4-10-8 SK 寿4F
TEL.03-5827-3655 営業時間 9:00～18:00



ガラッと変わったんですね。地域の方々との距離が縮まったのを実感しました。

「ことよんカフェ」を実施して分かったこと

江川さん

「ことよんカフェ」は90分の中で、自己紹介とミニ講座、そしてケーキとドリンクを楽しみながらの雑談タイムという3つの柱で構成されています。

以前、自分の旦那さんが認知症かもしれないという奥さんたちが、「ことよんカフェ」にいらっしゃったことがありました。そういう方たちにとって、地域包括支援センターや病院に相談しに行くというのは、とてもハードルが高いことなんですね。今まで自分の悩みを聞いてくれる場所がなかったから、「話を聞いてもらえて嬉しい」と、「ことよんカフェ」がすごく喜ばれています。お医者さんとは普段の生活ではなかなか接点を持ってませんが、カフェなら自分の友達のように気軽に相談ができる。それが、すごく勇気づけられるみたいです。ここにはケアマネージャーや地域包括支援センターの職員も来ているので紹介することもできますし、早くに医療機関につなぐこともできます。「ことよんカフェ」は、単に認知症予防の知識を学ぶだけでなく、自分の心配事を気軽に相談できる場になり始めているんですね。

藤さん

「ことよんカフェ」が成功しているのは、看護師さんが中心だったのも大きかったと思います。ドクターはどうしても住民の方から「先生」と呼ばれてしまうし、自分たちもそういう関係に慣れ切っているところがあるので、フラットな関係性が築きにくいんです。だからこそ、江川さんが中心に進めてくれて良かったと思っています。

江川さん

私はリーダーを務めさせていただいたのですが、初期の頃



は「自分が一生懸命頑張らなければ」と思っていました。でも、医師は医師の、ケアマネジャーはケアマネジャーの、看護師は看護師の役割を担うことで、上手くプロジェクトが回るようになって、肩の荷が下りただけでなく、楽しくなってきたんです。お互いがお互いを認め合い、補い合って、支え合う喜びを知ることができたと思います。地域に入る体験も新鮮でしたが、医師と看護師とケアマネジャーという立場の異なる人たちが、一つのチームになるということも学びが多かったですね。

まとめ&今後

馬淵さん

認知症予防カフェは、回数を重ねるごとに、いい変化が表れてきました。最初のうちは、地域包括ケアや介護の専門家の参加が多かったんです。しかし徐々に住民の方の参加が増えてきました。最近では、女性部のみなさんが、お友達や近所の方を連れてきてくださっています。

藤さん

認知症予防カフェを始めて二年目にして、今までは参加者としていらっしゃった方が、主体的に場を作る側に回ってきてくださるようになりました。みなさん元気よく自己紹介をしたり、積極的に発表してくださっています。以前は、参加者という立場で、「何をしてくれるのかな」という感じだったのが、今は一緒に認知症予防カフェを作ってくださいようになり、最初の頃からは考えられない変化が起きています。

江川さん

前回から女性部の方々に、次回のテーマを相談するようになったんですね。みなさんからの意見を募るようにしたら、よ



りスムーズにことよんカフェを運営できるようになりました。さらに実際の場合では、相談させていただいた方がお世話する側に回ってくれるので、場が活性化したんですね。ご自身も自分の喜びや元気につながっているようで、毎回おしゃれをしてきてくださる方もたくさんいるんですよ。

今後も私たちは、自助＝認知症予防と、互助＝インフォーマルネットワークを作る、というところに力を入れていきたいと思っています。これからのテーマは、場の“深まり”と“広がり”。“深まり”というのは、「ことよんカフェ」の場の進化です。住民の方の認知症予防を実現し、健康な人を増やすこと。そして“広がり”というのは地域の輪を広げることです。地域にはもっと孤立されている方がいらっしゃると思うんですね。そういう方が出てくださる場にしたいと思っています。

PROFILE



馬淵 茂樹 医師

滋賀県長浜市生まれ。京都大学医学部卒。東京トータルライフクリニック院長。名古屋大学医学部麻酔学教室、社会保険中京病院内科、新生会第一病院、栄診療所医療センターなどを経て、トータルライフクリニックを立ち上げる。



藤 純一郎 医師

福岡県生まれ。九州大学医学部卒。東京トータルライフクリニック内科部長、ウエルエイジングセンター室長。感染制御医（ICD）、内科認定医、抗加齢医学専門医。



江川 恵子 看護師

長崎県生まれ。名古屋市立中央看護専門学校卒業後、病院勤務を経て、白十字訪問看護ステーションに入職。秋山正子氏のもとで学ぶ。2012年にトータルライフ訪問看護ステーション雷門を立ち上げ、所長を務める。

講演要旨

【演題】 認知症の介護のエビデンスをつくる認知症情報学

本セミナーは昨年まで賛助会員のみを対象としていましたが、今回から一般の方まで拡大して開催。今年度は大きなテーマを「介護と科学」とし、今回、9月、11月と3回を予定。今回と次回は、静岡大学創造科学技術大学院特任教授の竹林洋一先生にご登壇いただきます。



私は情報学の観点から認知症の人の支援に取り組んでいます。大学時代は「音響信号処理に関する研究」で博士論文を書き、東芝では音声認識システムを実用化しました。MIT留学中に人工知能の創始者のミンスキー教授（2016年他界）と出会い、人間の知能や感情の共同研究を行ってきました。静岡大学に移ってからは、現場主義で安全運転支援を研究し、社会的に重要な子どもの発達や子育て支援の研究に従事し、現在は人類未踏の高齢社会の問題専門家の皆さんと連携し本気で取り組んでいます。

私たちは長生きをすればするほど認知症になるリスクが高くなり、医療の限界が明らかとなってきました。認知症を恐れるのではなく、認知症になっても生き生きと生活できる社会をつくるのが大切です。そのためには何が必要なのか、認知症情報学の観点から考えたいと思います。

30年前はまだ「介護」という言葉はありませんでした。日本は世界で一番高齢化が進んでおり「私たちはみんな研究者だ」との思いでチャレンジすれば、世界的な介護技術や生活環境をデザインでき、高齢者が安心して暮らせる社会が実現可能です。「人工知能 (AI) とか情報学というのは認知症のケアで役立つか？」との質問がよくあります。介護ロボットが注目されていますが、現時点では優しく愛らしく動作している段階です。認知症の方の状態を理解してコミュニケーションすることは困難です。また、人工知能のブームですが、囲碁や将棋の名人に勝っても、認知症の人との心に共感するロボットは当面実現できないでしょう。認知症の看護・介護を高度

化するための人工知能技術が必要です。アラン・チューリング（ノーベル賞受賞）が、「Can machines think?（機械は考えることができるか）」という論文を1950年に書いています。コンピューターがない時代に「機械は考えることができるか？」と。機械と違って人間は、「死んだら残されて困る人がいるな」と未来を考え、「私がこれをしゃべったら誰かがどう思うか？」と他人のことを考えるものです。だから、まず認知症のケアに際しては相手のことを「思いやる」人でないと困ってしまいます。

認知症とは病名でなく、正常に発達した知的能力が持続的に低下して日常生活に支障を来すような状態のことです。未解明な部分が多いため、経験的になりがちですが、もっと良い手段や環境がデザインできると考えることが重要です。しかし、介護施設は閉鎖的なので、適切な介護がなされているがエビデンス（証拠 / 根拠）が不足しており、介護の達人や未熟な人がいますが、その実態は明らかではありません。静岡大学と郡山市医療介護病院のユアニチュードケアの評価改善のためのケア映像を基盤とした認知症情報学の共同研究で、エビデンスが充実してきました。“ユアニチュード”は「あなたを人間として尊重していますよ」というメッセージをずっと送り続け、その結果、良好な変化をもたらします。例えば、ユアニチュード的に目と目を合わせ、優しく触れながら、コミュニケーションすることが重要なのです。みなさんは「忙しいとき、パートナーの目を見ていますか？」正直、難しいでしょう（会場：笑声）。

認知症ケアの高度化のためには、専門職のケアのプロセスと本人の状態 / 状況の情報の構造（特徴）に関するデータや情報が、定量化や平均的数値よりも重要です。数値が一人歩きしてしまうのは危険です。またデータのばらつきは、スキルのばらつきに起因することが多いです。エビデンスを取りにいく中で、多くの方は表面化した数字を見たがるものですが、それよりも、認知症情報学により「心（安心）と科学（安全）」という視点でケアのプロセスや環境の「見える化」を高度化することが重要なのです。

（次回（9/22）テーマ「人工知能と情報技術による認知症ケアの進化・発展」）



第3回 看護・介護エピソードコンテスト 選考結果

当財団では、『看護・介護エピソード』を通じて看護・介護の現場で出会ったエピソードを広く募集し、看護・介護の素晴らしさを、この機会に皆様方と共有したいと考えております。第3回選考結果と大賞作品をご紹介します。

大賞作品	ほがらかに楽しくおらせてくれやの 松村朋枝さん	
優秀賞作品	心の耳・・・心のリズム	新美寿栄さん
優秀賞作品	熊本地震が残したもの	谷富明子さん
優秀賞作品	地域に一員として物申すばい！ ～ホームホスピスが我が家になった三婆物語～	樋口千恵子さん
選考委員特別賞	むらかみさんでささえたい	山崎緋沙子さん

第4回は来年2月から応募を開始予定です。皆様からのご応募をおまちしております。詳しくは財団ホームページをご確認ください。<http://orange-cross.org/contest/>

第3回 看護・介護
エピソードコンテスト
大賞作品

ほがらかに楽しくおらせてくれやの

松村朋枝さん

「もう、ええ歳になったんやから、いつ死んでもええんや。そやけどの、最期の日までほがらかに楽しくおらせてくれやの。」

25年間勤めた職場を辞め、暮らしの保健室を併設する“コミュニティスペースややのいえ”の内で訪問看護ステーションの立ち上げを決意した私の前に正子ばあちゃんは現れた。小さい頃から“ばあちゃんっこ”だった私はすぐに正子ばあちゃんのとりこになった。94歳、若い頃からずっと田んぼや畑で汗を流し、70年守り続けた畑は正子ばあちゃんの自慢だった。近年、腰部脊柱管狭窄症・

多発性脳梗塞・パーキンソン症候群で中等度の認知症がみられていた。元々長男家族と同居していたが、3月に腰椎圧迫骨折にて入院。その後ひ孫が生まれたことと農家の仕事が忙しくなることで自宅には帰れず、隣町の老人保健施設に一時的に入所していたが、5月に長男嫁がタンクローリーと正面衝突するという大きな交通事故を起こし生死の危機に直面したため、自宅に帰るという選択肢を失ってしまった。しかし、施設での正子ばあちゃんの様子に愕然とした三男の嫁が引き取った。まだホームホスピス準備中のため、介護福祉社を中心に家族であり看護師である嫁と協力しながら訪問看護・リハとして正子



ばあちゃんに関わることになった。最初の衝撃は、正子ばあちゃんの気持ちが分かった時だった。彼女にとって一番嫌だったのは、「ばあちゃんは何もせんていいよ」「あれしちゃだめ、これしちゃだめ」と言われることが何よりも辛かったのだ。正子ばあちゃんにとっては「前みたいにできんのやから、な～んも役にたたん」、要するに“いなくてもいい存在”と言われている気がしたそうだ。

長年保育士をしていた私の母は、新潟県小千谷市中心の商店街で子育て支援センターの所長をしていた。中越地震があった2004年に自身も被災したが、そのセンターが急遽被災者の避難場所になり、母は一生懸命被災者の世話にあたった。避難所が解散した直後のことである。母が突然、「震災でお世話になった人へのお礼状の書き方がわからない」と一言言って泣き出した。その日を境に母の様子が変わってきた。長年つけていた5年日記が書けなくなっていたのだ。5月のある日突然父親から「家族会議を開きたいから実家に集まるように」と兄弟3人に連絡が入った。その夜、実家の玄関を開けた瞬間に尿臭がしてトイレにオムツが山すみになっていた。私は目の前に起きたことが信じられず、なかったことにしようと思い床についた。翌朝、父から母が若年性認知症になり尿意も分からない状態でオムツをつけていることを聞かされた。母親の介護をするために片道300kmを4時間かけて毎週通った。そのときに、限られた時間の中で食事の用意や家の掃除・母親の排泄介助などをしなければいけなかったため、同じような言葉を母親に言ったことがあることを思い出した。正子ばあちゃんの言葉を聞きながら、「もしかして、母親も同じような気持ちだったのかもかもしれない」とこれまで言葉にしてこなかったことを思い出した。母親の介護に対して後悔がある私は、その日から「正子ばあちゃんらしくいて欲しい。そのためにはどうしたらよいか」ということを仲間と一緒に真剣に考えるようになった。

正子ばあちゃんの米寿を記念してつくられた、聞き書

き冊子を読んだ。その冊子の中には、正子ばあちゃんの口癖の「今が一番しあわせ」という言葉がちりばめられていた。毎日の介護や看護・リハとして関わる中で、正子ばあちゃんからのひとことを「ひとこと聞き書き」として記載していくことにした。今までは、まずは病気の症状や進行具合、既往歴、リスク管理、身体能力や生活能力などを中心に見てきたが、ひとこと聞き書きを意識することで、カルテには正子ばあちゃんの生き生きとした様子が手に取るように伝わるようになった。正子ばあちゃんの生きざまを通して、「これからどのようにしたいのか」を常に意識して聞くようになった。正子ばあちゃんの部屋は、トイレに一番近い場所にした。ベッドや手すりといった環境を整えると自力でトイレまで行けるようになった。彼女は徐々に自信をつけてきた。「今、一番したいことは何？」と聞くと、「草むしりやあ」と言った。部屋の窓から見える裏庭の雑草を見ては、毎日刈らないと伸び放題になると気にしていた。ケアマネや福祉用具のスタッフとも連携し、レンタルの階段と手すりをつけて裏庭に出て草むしりができるようにした。自信がついてくると、面白いように声かけの方法なども、関わるスタッフひとりひとり違っていて、正子ばあちゃん是人ごとに対応を変えていることがわかった。そして毎日、正子ばあちゃんが話す楽しい言葉を聞き流さないようにと、スタッフ皆で自慢げに語り合うようになった。看護や介護に携わる私達にとってたくさんのヒントが詰まっており、考えさせられる。

正子ばあちゃんのひとこと聞き書き集

●認知症検査をしているときのこと

「今日は何日かって？そんなに知りたきゃ自分で新聞をみてくりゃええ。別にわからんでも生きていけるわい」……してやったりの顔は正子ばあちゃんのお得意技である。

●嫁が緊急訪問で呼ばれて出かけるときのこと



看護・介護エピソードコンテスト 大賞作品
【ほがらかに楽しくおらせてくれやの】

「あんたはうんこで食べているんやから、早よ行って来んならん。私は寝て留守番しとるがいね。」

●歩行練習で手を引きながらトイレに移動している最中に
「あんた歩かせるの上手いなあ、こんなに早く歩けるなら夜逃げするのに困らんわ」

●一緒に食事をしているときに食べやすいように食材を小さくしたときのこと
「そんなにちーさくしたらだんだんの一なる。あんたは身体が大きいいからいいけど、私はちんまいから生まれ変わったら猫かネズミになるんやなあ」

●食事後に…
「腹が膨れると、眼瞼がさがる、ああありがたや～」

●物忘れをすることに落ち込んでいる正子さんに対してスタッフが、私達が代わりに覚えているから大丈夫だよと話をした時に、
「何でこんなに眠いんやろ。寝て起きると朝か夜かわらんようになるわあ。えっ？今、夕方の5時かってか？朝の5時かとおもーとった。あんたらがおってくれんときゃあ、忘れてもいいってか？ありがとう」



●はじめて5本指の靴下を履いたときに薬指の下に隠れて見えなかった小指を見て、
「小指がしゃばにもどってきた～」

●トイレに便を落としてしまったときに、
「わてのうんこはコロコロしてるから落としても拾いやすいぞ」
それを受けたスタッフがコロコロうんこを「黒いダイヤ」と呼んだことに対して、
「本物のダイヤが出てくるかって？そんな原料食べておらんからできんわ～」

●85歳の友人と話をしている中で、
「あんたのその服いいなあ、しょうぶわけ（形見分け）にもらおっかなあ。死んだらね。」

●スタッフにケアを受けながら
「人のあっこ（悪口）は言ったらいかん、必ず自分にかえってくるんや。」
「幸せなのは、あんたが努力しているさけや、あんた（私を見て）も遊んどらんと負けんと仕事しまっし。」
「愛しているってことは、め（目）え～つけてもらうことや。めえ～つけて、結婚するのでつばつけて、子供が生まれて鼻つけて、人生最期にうんつける。」
「歳をとると顔にしわばかり増えるけど、頭の中はツルツルになってしもうたね。すぐに忘れる…。」

ショートステイから帰ってきた日に、腰をかがめて廊下を歩きながら、
「お母さん（三男の嫁）に会えなくて、さみしかったあ～～」と泣き出した。

あんたの役に立とうと思ってここに来たがに…洗濯物1つたためんがんなってしもうて、草もひけんくなって、世話かけるばかりや。



認知症の人としてではなく、正子ばあちゃんとの日々の中で、接し方や言葉かけによって、人はこんなにもその人らしく暮らしていけて、元気になるということを目の当たりにしている。

私の母は“若年性認知症”だった。認知症対応型の小規模多機能に通っていたときのことは忘れられない。毎回のように、能面のような顔で帰ってくると、『私と面と向き合って顔を合わせているのに視線が身体を通り抜けて絡まない。』という寂しさは、今も身体の記憶として残っている。母親のことを分かって欲しいという一心で、『保育士だった母親がどのような人生を歩んできたのか』、『押し花が好きで、保育園の卒園児からも手紙をもらうほど慕われていたか』などを主治医や事業所のスタッフに伝えた。主治医は、「あなたがそんなにお母さんのことを細かく言うから、お母さんが良くなりませんよ」と言われた。その一言は忘れない。また、事業所のスタッフからは面倒くさいといった態度をされて悔しかったことを思い出した。母は若年性認知症と診断されてから10年を生きた。病院で亡くなったときのことである。看護師から「ご遺体、どうされますか？」と聞かれ、戸惑い動揺した。死亡宣告をうけて数分後、温かいぬくもりを残している母親の死を受入れられていない私にとって、その言葉は重く、同時に後悔の念が沸きだしたことを思い出した。「何で、お母さんを病院で死なせてしまったのだろう…。しかも口を開けたままの状態で。」

人は、いつ誰と出会うかによってその後の人生が大きく変わる。

94歳の正子ばあちゃんは、居場所をなくし、役割をなくし、自分が価値のない人間だといわれてきたが、同居家族の交通事故をきっかけに、やあのいえに自分の人生をかけてやってきてくれた。だからこそ、正子ばあちゃんが発する言葉の意味は深い。熱が出る、転ぶ、咽る、突然意識がなくなる、徐々に認知症が進み几帳面で上手だった洗濯物を畳むこともできなくなりできることは少なくなっている。だけど、“正子ばあちゃんらしさ”は健

在である。一秒前に薬を飲んだことも忘れる日々、忘れても大丈夫と接するスタッフと一緒に過ごせることがうれしくなった。人は、食べて、寝て、排泄する、そして心の拠り所、心を動かす仕掛けが必要なのである。正子ばあちゃんは、友人と一緒に、町娘役で認知症金色夜叉という劇に出演した。が、出演した翌日には、「そんなものに出ておらん」とすっかり忘れているが、写真を見せると「私に似た人は、た〜んとおるもんや」と言い張り、今でも出たことを認めてくれない。

すでに認知症である正子ばあちゃんは、医学的には海馬10%しか機能しておらず、ドーパミンの分泌は0、長谷川式認知症スケールは0点、食事も介助することが増え、ベッド上で過ごす時間が長くなってきた。しかし、正子ばあちゃんらしさは健在だ。

今は、「いつ死んでもいいけど、ほがらかに楽しくおらせてくれやの。楽しくあの世(天国)に行けますように」、「病院には行きたくない、最期までここにおらせてくれやの」と言っている。元気なときはベッドの柵を超えて転びそうになったり、ベッドのコンセント抜いたり…。知恵比べの毎日。正子ばあちゃんの存在自体が私達の訪問看護やホームホスピスの核となる「真の拠り所となる場所と人」の大切さを身を持って教えてくれている。そして、正子ばあちゃんの笑顔を見たくて、スタッフは競争してネタ探しをする。最初は、正子ばあちゃんにとってやあのいえは拠り所だったが、今は正子ばあちゃん自身がやあのいえの拠り所になっている。私は、正子ばあちゃんから言われた「人のあっこは言ったらいかん、必ず自分にかえてくるんや。」という言葉に胸に刻むことで、他の人に穏やかに接することができるようになり、イライラしなくなった。

やあのいえにとって、正子ばあちゃんの存在そのものが大切であることをこころにとどめながら、日々の患者さんと毎日向かいあっている。

NEW 賛助会員の地域包括ケア

愛知県 おれんじの輪



地域福祉サポート(非営利活動) おれんじの輪
会長 江口照美さん

地域を支える「場」を目指して 多様な取り組みに挑む。

一般財団法人オレンジクロスの賛助会員・福祉の里（愛知県北名古屋市）がサポートする「おれんじの輪」では、地域にお住まいの方々を支えるさまざまな活動を行っています。発足した理由などについてお話を伺いました。

朝食をリーズナブルに提供

「おれんじの輪」は、高齢者のサポートをはじめとした地域の福祉支援を目的に2016年6月に発足し、8月には活動を始めました。発足にあたっては、愛知県を中心として在宅介護事業を展開する「福祉の里」が創業の地である北名古屋市に貢献したいとの考えから、場所を提供するなどサポートをしています。

活動のメインとなるのが、毎週木曜の「お茶の間食堂」です。朝9時から11時30分まで、朝食をなんと200円で提供。ドリンクだけでトーストなどがついてくる「モーニング」が盛んな土地柄ですが、パン食で低栄養になりがちなため、ご飯・お味噌汁に加えてお肉もあるなど栄養バランスにもボリュームにも配慮しています。8月の開始当時から大人気で、毎週欠かさず訪れる皆勤賞の方もいるほど、地域にお住まいの方にとって大きな楽しみとなっています。参加者もほとんどが徒歩や自転車で訪れるように、近隣の方がメインで、さらにその常連の紹介で新たな参加者も増え、毎回30人前後は参加するなど、どんどん地域に浸透しています。

スタート以来、毎回欠かさず来ているという一人暮らしの女性は、「夫に先立たれ、毎日の朝食は一人なので、どうしても簡単に済ませてしまいがちです。その点、ここならいろんな食材を使ったお惣菜が一度に、しかもとてもお手頃な価格で楽しめるのでとてもありがたい。毎週、すごく楽しみにしているんですよ」と話します。

介護者にも広く開放

会長の江口照美さんは、「徒歩でも自転車でも、外出することで足腰の筋力を保つことにつながり、認知症の予防に効果的です。また、近隣の方が中心なので、顔見知りだった方同士がここで顔を合わせ、お友達になることもあるなど、地域のつながりを生む一助にもなっています」とその意義を解説します。午後からは1杯100円でコーヒーや紅茶が楽しめる「元気が出るカフェ」となり、そちらにも足しげく通う方が少なくないそうです。

「お茶の間食堂」も「元気が出るカフェ」もいずれも利用者



おれんじの輪は、名鉄犬山線の西春駅から徒歩10分弱の距離にあります



30食限定の朝食は基本的にすべて手作り。
100円プラスすれば食後のドリンクも味わえるとあって大人気です

は高齢者がメインですが、それに限らず要介護者を抱えるご家庭の方にも広く開放。悩みを抱えがちな介護者にとって息抜き場となっています。この「輪」がますます広がるようにと、地域の民生委員にもご協力いただき活動のPRに努めています。「おれんじの輪」が、地域のつながりの活性化に役立ち、さらに地域にとって大切なコミュニティの場となっている様子が伺えます。

さらに、地域包括ケアシステムの構築の一助となるよう、医療・介護の専門職の人たちが昼食に集まる「おれんじ食堂」を月1回開催。医師や介護従事者から司法書士まで、高齢者・介護者のサポート役となれる職業の方が食事を共にし、気軽に交流できる場となっています。毎回15人ほどが参加し、医療・介護にかかわる多職種間で、貴重な情報が交換できると好評です。

市役所職員から転身

これらの活動にエネルギーに取り組む江口さんは、もともと北名古屋市の市役所職員で、長年健康・福祉の分野の業務に取り組んでいました。退職後、もともと交流のあった福祉の里の代表・矢吹孝男さんから声をかけられ、行政では難しい、地域の人たちの生活に寄り添った地域包括ケアの活動に取り組み始めました。

「かねてから、創業の地である北名古屋市に何らかの形で貢献したいと考えていました。地域に貢献するためには、地域の最前線で活動していた人をお願いするのがベスト。江口さんが退職するにあたりすぐ声をかけ、『行政でできなかったことを、今こそやってほしい』とお願いしました」（矢吹さん）

活動にあたっては、拠点を福祉の里の事務所と共用にするなどハード面のみをサポート。「ソフト面では、全部、江口さんの自由にやってほしいとお願いしてあります」（矢吹さん）。その言葉通り、江口さんが市役所職員時代から「こんな取り組みがあればいい」と考えていた活動を実行しており、「おれんじの輪」が地域にとって大切な「場」となりつつあります。



開設にあたっては、福祉の里で使っていなかったキッチンなどを活用し、コストをおさえました

高齢者の移動支援も行う

「『おれんじの輪』でやってみたい活動はいろいろあり、特に行政とのつなぎ役をやりたいですね。地域の声を吸い上げ、それを行政まで届ける。私たちのような団体が、地域のまとまった意見を提言すれば、行政にとっても聞き入れやすいでしょう」と江口さんは話します。

活動範囲を広げ、またさらに推し進めるためにも、現在NPO法人化を予定しています。そして今年度、新規の取り組みも計画しており、外部から講師を招き、介護をしている方を対象にした研修会を不定期に開催しています。さらに在宅医療の理解を深められる講演会を開いたり、司法書士を招いての暮らしの相談会を実施したりと、高齢者とその家族が安心できるような事業を行う予定です。

さらに今後力を入れていくのが、高齢者の移動支援です。「買い物も通院も、徒歩で行けるのが理想ですが高齢者だとどうしてもお一人では厳しいケースも増えてきます。買い物ひとつとっても荷物がネックになります。かといって外に出ず歩かないと、筋力の衰えも心配されます。そういった問題を、私たちが支援できる手段を研究したいと考えています」（江口さん）。

安心できる「場」となりたい

「何か困ったときや、ちょっと話したいとき、また朝食をみんなで食べたいとき。そんなちょっとしたときに『おれんじの輪』に行こう、そしてここに来れば安心できる、と思ってもらえる場にしていきたい」と江口さんは抱負を語ります。

そのためにも、将来的には福祉の里のサポートを受けずに単独で収支を得て活動できる体制を整えたいと考えています。江口さんは今後についてこう話します。「地域にとって本当に必要とされ、そして地域の支えとなる。そんな地域にとってなくてはならない存在を目指します」。

地域福祉サポート(非営利活動)おれんじの輪

〒481-0033 愛知県北名古屋市西之保深坪10 1F
TEL.0568-54-1220

株式会社福祉の里

〒481-0034 愛知県北名古屋市北野天神13
TEL.0568-23-5232



向かいには福祉の里の「ゆうゆう介護 知恵の泉」があるという好立地

財団レポート

弊財団では、設立当初から、「家庭医療・老年医療研究委員会」を立ち上げ、在宅医療・看護・介護現場における諸課題の研究に着手しております。今般、その研究の1ステップとして、第19回日本在宅医学会大会（6月17日～6月18日、会場：名古屋国際会議場）にて口演を行いましたので、発表概要をお伝えいたします。



発表者
財団研究員 大久保 豪

発表タイトルは、「訪問診療医・訪問看護師に求められている連携と役割機能：両職種間におけるギャップの見える化から在宅医療の円滑化を再考する」でした。本発表の目的は訪問診療医と訪問看護師間の連携上生じるギャップの解消に向けて、その実態および発生構造・要因を明らかにすることです。研究委員会では2014年10月から2017年5月の間、訪問診療医や訪問看護師計15名のインタビュー調査を行い、その内容を分析し、議論を深めてきました。

その結果、訪問診療医と訪問看護師間のギャップとして、《在宅医療の知識に関するギャップ》、《在宅医療の意識や役割分担に関する考え方のギャップ》、《診療行為・看護行為におけるギャップ》があり、それぞれのギャップに対して職種間の《コミュニケーションにおけるギャップ》が大きな影響を与えているという全体図を作成しました。学会では各ギャップのより詳細な内容を発表すると共に、コミュニケーションのギャップとしては、コミュニケーション不足（存在しない、必要ない、苦手、言いがらい）、必要な時に方向性や指示がない、必要な時に報告・連絡・相談がないといったものが挙げられたことを発表しました。

また、研究委員会ではギャップの発生要因についても分析を進めており、パーソナリティによるもの、それぞれの専門領域が担ってきた役割の認識の相違、在宅医療の教育・学習が不十分、といった要因があるのではないかという内容を紹介しました。

今後はギャップの発生要因の除去などを通じて、コミュニケーションのギャップを埋め、診療行為や役割意識といったギャップをなくしていくこと、あるいはギャップがあったとしても患者・家族が望ましい在宅医療を受けられるような制度・環境作りに寄与していきたいと考えています。

なお、発表は一般演題口演として、6月18日（日）の13時10分～14時10分、第7会場にて行われました。改めて本インタビュー調査に協力をしてくださった皆さまに御礼を申し上げます。



一般財団法人オレンジクロス 賛助会員募集のご案内

一般財団法人オレンジクロスの活動趣旨・取り組みにご賛同いただける
個人・法人の賛助会員を広く募集いたします。

● 賛助会員年会費：個人会員（1口）10,000円 法人会員（1口）100,000円

● 期 間：毎年7月1日～翌年6月末日

● 賛助会員特典：① 各種情報提供
② 広報誌の配布
③ 各種セミナーの無料招待
(セミナーの内容は16頁を参照下さい)

● 申し込み方法：当財団ホームページ『賛助会員について』から
申込書をダウンロードして頂き、FAXにてお申込み下さい

<http://orange-cross.org/about/member/>

(アイウエオ順)

法人賛助会員	URL
株式会社コスモスケアサービス	http://www.cosmos-group.co.jp/care
株式会社ツクイ	http://www.tsukui.net
株式会社デベロ	http://www.develo-group.co.jp
株式会社福祉の里	http://www.fukushinosato.co.jp/
株式会社やさしい手	http://www.yasashiite.com
公益財団法人 星総合病院	http://www.hoshipital.jp
合同会社リハビリコンパス	http://www.compass100.jp
社会福祉法人 こうほうえん	http://www.kohoen.jp/
社会福祉法人 伸こう福祉会	http://www.shinkoufukushikai.com/
社会福祉法人 豊の里	豊栄グループ： http://www.houei-group.or.jp
	豊栄クリニック： http://www.houei-group.or.jp/clinic/index2.html
田邊ホールディングス株式会社	http://www.b-staff.jp
日本生活協同組合連合会	——



(詳細は逐次財団ホームページ <http://orange-cross.org/> にてご案内します)

● 第3回オレンジクロスシンポジウム

参加無料

日時：7月21日(金) 14時～17時 (14時～15時はエピソードコンテスト表彰式)

会場：トラストシティカンファレンス京橋 STUDIO2・3 (京橋トラストタワー 4F)

演者：暮らしの保健室 室長/マギーズ東京 センター長 秋山正子氏

演題：「つながる・ささえる・つくりだす在宅現場の地域包括ケア」

講演概要：日々の業務に追われる中でも、お互いに繋がりあう実感が得られる瞬間があります。そこから互いを支えあう地域との拡がり、そこから新しいものが作り上げられていくプロセスが見えます。始まりは、毎日の実践、利用者に向き合い、その家族、地域へと目を広げればそれが「地域包括ケア」につながります。

● オレンジクロスセミナー

・ 第2回

賛助会員無料

一般参加5,000円

日時：9月22日(金) 15時～17時

演者：静岡大学創造科学技術大学院 特任教授 竹林洋一氏

会場：TKP 八重洲カンファレンスセンター

演題：「人工知能と情報技術による認知症ケアの深化・発展」

講演概要：人工知能(AI)や情報技術(IT)による第四次産業革命の萌芽期となり、高齢社会における医療や介護の世界を大きく変えることは間違いありません。講演では、高齢社会を安心、安全、豊かにするためのAIとITの技術トレンドについて解説し、情報処理学会の高齢社会デザイン研究会の取り組みを紹介します。さらに、人工知能学会の近未来チャレンジプロジェクト「認知症の人の情動理解基盤技術とコミュニケーション支援への応用」での研究成果を中心に、認知症ケアの深化と今後について論じます。

・ 第3回

賛助会員無料

一般参加5,000円

日時：11月17日(金) 15時～17時

演者：株式会社シーディーアイ(Care Design Institute Inc.) 代表取締役社長 岡本茂雄

会場：TKP 東京八重洲カンファレンスセンター

演題：「介護分野における人工知能の可能性」

講演概要：人工知能は、ディープラーニングの進化により、実用化の可能性が一気に拡大。一方、ケアプランには、医療、介護、生活、家族関係、経済状態など様々なことが影響し複雑。まさに、ここは人工知能の活躍の場であり、その現状を報告。



一般財団法人

オレンジクロス

広報誌 オレンジクロス | 夏号 2017 SUMMER VOL.03 | 2017年7月1日発行

発行：一般財団法人オレンジクロス

〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6階 TEL. 03-6228-7216 <http://orange-cross.org/>



本誌は、「植物油インキ」「水なし印刷」を採用した環境にやさしい印刷物です。